

休日本気で「農力」アップ

平日の仕事とは別に、休日は農作業にこそしむ「平動休農」と呼ばれるライフスタイルが広まっている。趣味の野菜作りなどにとどまらない本格的な農作業を、休日に取り組む実践できる場が増えているからだ。就農を目指す人もいて、農業の新たな担い手を育てる場にもなりつつある。

(大森亜紀)

川崎市の丸山美和さん(37)は、パートの仕事が休みの火曜日に、東京都町田市の畑で野菜作りに励み汗を流している。「土に触れると元気がも

らえる。食べ物を自分で作るのが面白くて」

丸山さんは、農家の耕作放棄地を活用するNPO法人「農に学ぶ環境教育ネットワーク」の農作業を手伝うボランティアに、昨年9月から参加した。同ネットワークでは、農薬や肥料を使わない自然農法に取り組み、約1年前からボランティアを受け入れ、現在は約30人が登録する。

映像制作の仕事をする大橋正人さん(46)は、「45歳を過ぎて、忙しすぎる今の働き方

でいいかを考えるようになった」と話す。仕事の合間に畑に通い、いずれは農業を仕事にしたいという。

同ネットワーク理事長の木村広夫さんは「農業に憧れる人は多いが、実際に取り組まない」と話す。この春からは、一般の人に有料で水田でのコマ作り体験も始める予定だ。

これまで、自治体が運営する市民農園などで小さな畑を借り、趣味の野菜作りなどをする人は多かった。だが、最近人気を集めるのは、指導を受けながら決められた農法で生産する本格的な農作業だ。

東京都三鷹市の「三鷹オーガニック農園」では、野菜の

農地で栽培研修人気、検定も

有機栽培法などを、休日にも1年かけて学べる。「農業を『体験』するだけでなく『勉強』してもらい、できれば担い手になってほしい」と責任者の金子晃さん。約40坪の畑を60区画に分けて貸し出す形で研修を行う。参加者は大学生から社会人、シニア世代の夫婦まで様々だ。

一般社団法人「都市生活者の農力向上委員会」は、こうした農業へのかかわりを「平動休農」と呼び、啓発活動を行っている。代表理事の西村豊さんは、「東日本大震災後、便利でモノがあふれた暮らしを見直す機運が高まり、生活のあるべき姿を農業に求める人が増えつつある」と話す。

2009年に農地法が改正され、企業やNPO法人が農地を借りやすくなったことも背景にある。農地を借りた団体などが、一般の人に農作業を気軽に学べる機会を提供するようになったという。

同委員会では来月23日、「平動休農」などの形で農業にかかわる人を対象に、自力で農作物が作れる能力などを問う「農力検定」を、東京で初めて実施する。「都市生活者の力を借りて、耕作放棄地を再生させるなど、新たな農業の形が生まれる可能性があります」と西村さんは期待している。農力検定の詳細は同委員会ホームページ(<http://re-culti.org/>)。



鳥獣の被害を防ぐため、葉野菜の畑の上にシートを敷く手伝いをする丸山さん(左から2人目)(東京都町田市で)